

ふるさと再発見 第27回

Re:discovery Omihachiman

文人墨客や志士らが集う 文化サロンの役割

八幡の花街の史実を一冊に

このほど、北元町の山本晃さんが、江戸時代から昭和30年代初期にかけ、市内に実在した花街について写真や文献などと共に紹介する『艶やかさをもとめて 八幡の花街』を自費出版されました。平成17年の池田町老人会主催の文化祭で展示されていた花街関連の写真を見たのがきっかけで、15年の歳月をかけて発刊された力作です。

近江八幡の花街は、豊臣秀次公が八幡山城を築き碁盤目状の城下町を造成した際に安土城下で設けられた花街を引き継ぎ、八幡堀と寺内町に挟まれた西の町外れに設けられたのが始まり。池田町界隈に大小数十軒の料理茶屋が立ち並び、幕末には百人余の芸妓や舞妓がいて、大いにぎわいました。



池田町二丁目にあった料理茶屋「大高」（写真撮影時の大正期の店名は「京春」）（山本さん所蔵）



15年の歳月をかけ近江八幡の花街の歴史をまとめた労作を手にする山本晃さん

天保年間に出された全国の花街の格付けをした「諸国遊所競」では京都の先斗町と同格の位置に名を連ねていました。また、天保11年3月には妓女による「練り物」（仮装行列）が催されましたが、古今東西の花街で練り物が行われたのは京都の祇園や島原、大阪の曾根崎新地

など日本有数の大都市の数か所で、当時人口7千人余りの小都市で催されたことは八幡商人の財力の賜物といえます。なかでも八幡花街随一の料理茶屋「大高」（のちの「金鷹」）の30人余りの芸妓、舞妓はすべて京都祇園から雇い入れていました。294ページにおよぶ著書の中では、都市計画による道路拡張工事で昭和58年に現住所に転居する以前、江戸時代から長く池田町の一角に居を構えていた山本家が、「大高」から代々預かってきた数多くの写真や掛け軸や短冊、扁額、屏風、調度品、楽器などを解説を交えながら紹介しています。



男衆とともに新年の挨拶まわりをする芸妓や舞妓（大正初期・山本さん所蔵）

衆をはじめ、政治経済の中心地である京都にも近いことから各地から数多くの著名な文人墨客や西川吉輔や梁川星巖をはじめとした勤王の志士らが集まり、酒宴を楽しみながら、政治経済文化について熱くおしゃべりに興じていた格調高い文化サロンであったことがうかがえます。

「湖東の小都市・近江八幡に、京都と肩を並べた気品と艶やかさを誇る花街があり、町衆の教養を押し上げ、幕末日本の変革に関与した多くの人々も出入りし、明治維新の影の舞台ともいえる情報発信地であった奥深い歴史を知ってもらえれば幸いです」と山本さんは話しています。著書は、近江八幡、安土の両図書館に、山本さんから寄贈を受けています。

！ 新型コロナウイルス関連の情報は、市ホームページをご覧ください

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本紙掲載の催しが急に中止や延期になる場合があります。開催の可否は事前に担当課または主催者へご確認ください。また、最新情報は、市のホームページ <https://www.city.omihachiman.lg.jp/> で随時発信しておりますので、ご確認をお願いします。

人口と世帯 令和3年2月1日現在 ()は前月比

総数	82,315人	(-16)
男	40,467人	(+7)
女	41,848人	(-23)
世帯	34,527世帯	(+11)

※外国人住民(42カ国・地域/1,569人)を含みます。